

3月からいよいよ開校する
北海道初の食育とプログラミングを融合した
『食育deプログラミング教室』体験会が開かれました

子どもたちも大興奮！プログラミング教室と料理教室が一体となった「食育 de プログラミング教室」の体験会が2月23日、メディア陣に初めて公開されました。体験会は午前と午後の2回開催され、小学2年生から5年生まで、計11名の子どもたちが参加しました。



札幌市中央区大通西22丁目に新たに誕生した黄色いリボンのラッピングビル「恒志堂円山ビル」

「食育deプログラミング教室」とは、食育とプログラミングを同時に学び、2カ月に一度、プログラミングの授業に実際に調理も行う教室。子どもたちが好きな「食べること」への興味を通じて楽しくプログラミングを学び、また、プログラミングと親和性が高い「料理」に着目した、これまでにない子どもの習い事教室です。



パソコンに向かう子どもたち

「食育deプログラミング教室」概要

日時:毎週土曜日(10:00~11:00)

1レッスン 60分 月4回 年45回程度(予定)

場所:恒志堂円山ビル 札幌市中央区大通西 22丁目1-1

(黄色いリボンが目印の二階建てビル)

対象:小学校1年生以上(定員12名まで)

月謝:13,200円(税込)※2か月に一度程度、実際の調理体験を含む

入会金:11,000円(現在、入会金無料の開校キャンペーン実施中)



体験会の前半は、食育をテーマにしたプログラミングの授業。

本教室では食育とプログラミングを融合させたオリジナル教材で学習します。(Scratch言語)

この日は、レストランでオーダーされた卵料理を作るため、プログラミングで鶏を動かし、たまごを産ませ、たまごを獲得するまでの工程を作成しました。プログラミング経験のある子も、初めてプログラミングを体験する子も夢中でパソコンに向かって、プログラミングを楽しんでいました。



授業の最後には、北海道食材やフードロスなどについて学ぶ時間もあり、札幌市清田区の平飼い卵農家の「永光農園」取材した動画を見て、子どもたちは色や形など見た目が悪くて商品にはできない卵があることを学びました。また、いま最も旬な魚「ニシン」について、札幌中央卸売市場の森脇恒之氏が登壇し、漁獲量が増えたものの小骨が多いことなどを理由に消費量があがらないニシンの現状について直接聞き、学ぶことも出来ました。



そして、後半にはキッチンスペースへ移動。2ヶ月に一度、開催される料理教室の体験をしました。毎回オムニバスで先生が変わり、イベントでは CEF-1 グランプリの初代チャンピオン・下國伸シェフが特別講師を務めました。

このイベントのために、「永光農園」からは色や形などが理由で商品にはならない卵、札幌中央卸売市場からはニシンが提供されました。初めて触れる食材に子どもたちも興味津々。これらを使って、料理をするのですが、今回、子どもたちの想像を最大限に引き出そうと、下國シェフは事前にレシピは用意せず、子どもたちとの話し合いの中で作るメニューを決めて行きました。



『たまご料理って何を思いつく？』

『ニシンって小骨が多い魚なんだけど、どう料理したら食べやすいかな？』



子どもたちと会話しながら、いよいよレシピが決まりました。

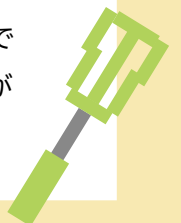
午前の部チームは『ニシンのオムライス』、午後の部のチームは『ニシンフライ&タルタルソース』、卵をつかってマヨネーズからつくりました。



はじめて包丁を使う子やはじめてニシンを食べる子、みんなのはじめてを一緒に応援です。

ニシン×オムライスは『チキンより美味しい！』『毎週でも食べたい！』など大好評。ニシンフライ×タルタルは、魚嫌いな子もいましたが『美味しい！いろんな味がしてこれなら食べられる！！』と見事に完食してくれました。

子どもたちの体験を見届けた母親、父親からは『子どもがプログラミングに興味があるけど、私では教えられないから習わせてあげたい』『家だと包丁に挑戦させられる機会がなかったからありがたかった』など、多くの意見があがりました。



小学校の必須科目に「プログラミング教育」が導入されて3年が経ちます。その目的は「小学校段階における論理的思考力や想像力、問題解決能力等の育成」とされています。



「食育de プログラミング教室」を運営する
有限会社恒志堂の佐藤元春代表は
教室の狙いをこう話します。



佐藤元春 代表

以下、佐藤元春代表インタビュー

Q食育deプログラミング教室とはどういうものですか

「我々がやりたかったことが、**リアルとバーチャルの架け橋を作る**ということで、プログラミング思考力を学ぶために料理を作って、料理の手順とプログラミングの言語を組み立てる手順が非常に似ているので、そこで食育とプログラミングというものをまず学んでもらいたいということで開発しました。」

Qなぜいまやろうとした

「小学生もプログラミング思考力を学ぶ授業が導入されて、日本としてそういう力が必要とされているのがあったので、ただ漠然とその言語を教えるのではなくて、やはり楽しく、いい意味でゲーム感覚で学んでほしかったので、我々は面白おかしく学べる教材を作りました。」

Q具体的にどういう人たちに食プロに参加してもらいたい

「基本的には小学生。これから本格的にプログラミングを学びたいという人や将来、自分で同じようなゲームを作って動かしてみたいとか、そういう何か興味のある人、ゲームに興味があったり、プログラミング的思考ってどんなことなんだろうと、もっとかみ砕いて教えてほしいとか、そういう要望がある方に参加してもらいたいですね。基本的には小学生にたくさん通ってほしいなと思っています」

Q食プロを通して得られるものは

「やはり一つ大事なのは、単純にプログラミングを学ぶだけではなく、2カ月に一回、シェフとか管理栄養士を招いて、実際のキッチンで自分たちが学んだことを再現するので、たとえばフードロスの問題とか、食材を運ぶ輸送コストの問題だとか、言語だけではなくて、みんなが直面している、気付いていない食の問題も扱えるので、生きる知恵といいますか、そういうものが養えるのが良いのではないかなと思っています」

Qコミュニケーションを図る意味でも、学校以外の居場所を作るという点でも利点があると思うのですが、いかがですか

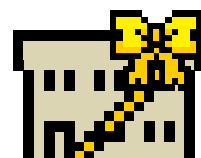
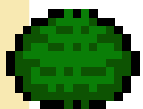
「そうですね、やはり子どもたちって、少しでも多く笑顔を出したほうが元気で前向きに育っていくと思うので、それが学校だけではなくて、様々な習い事がある中で、こういうプログラミング教室に通って、講師とか友達とコミュニケーションをして、授業中はゲームを活用して楽しみながら、それで笑顔になれば前向きな気持ちで成長してくれるのではないかなと思います。そんな姿をイメージしてこの教室をオープンしました」

Q親御さんの中にはゲーム=だめなものというイメージの方もいるかもしれませんが、いまの時代、ゲームとかプログラミング的思考は求められているんですか

「求められていると思います。ゲームのいいところって好きなことは反復して熱中して、気付いたら知識知恵になっているじゃないですか。子どもたちが持っている反復力とか、興味関心をゲームを活用して、引き出すという事がすごく大事だと思うので、頭ごなしにゲームを否定するのではなくて、なぜ子どもたちがそこに興味関心を持っているのか、どうして反復しているのかということをご家庭でも子どもたちの様子を見てあげるべきなんじゃないかなと。私としてはゲームの持っている魅力をうまく活用してこの思考力を磨いてほしいなと思っています。」

Qこの教室から将来どんな子どもたちを輩出したい

「私がドラゴンクエストをはじめとするロールプレイングゲームが大好きなので、一緒にゲームを作ってくれる人、ある意味、人生も仕事もロールプレイングゲーム、冒険だと思うので、私たちの会社に入って、一緒に仕事ができるような人材が生まれたら、正直すごい嬉しいです」





講師:長谷川信寿さん



プログラミング教室の講師を務める長谷川信寿(はせがわ・しんじゅ)さんインタビュー

Q プログラミング教室ではどんなことを教えてくれるんですか？

「プログラミング教室ではスクラッチというビジュアルプログラミング、色を使ったり、音を出したりというような簡単なプログラミング言語で、食育、食べること、北海道について食にまつわる話をプログラミングを通じて学べるような授業です。」

Q 難しくないですか？

「そうですね、よく難しいと言われるんですけど、レゴブロックみたいにブロックを組み立てていくだけなので、案外操作してみると簡単だと言う声も多い」

Q 未経験者でも大丈夫ですか？

「おさんによって程度の差はあるのですが、私たちの教室ではマウスの使い方から、キーボードの使い方まで最初から最後までフォローしていくので、初めての方でも、安心して通える教室になっています」

Q 兄弟で参加することも可能？

「もちろんです。兄弟で参加していただいて、そこ分からないなというところを皆さん教えあったりするようなこともありますし、友達同士で参加していただいてもかまいません」

Q 実際に参加したお子さんからはどんな声が

「**北海道の食を自分の口から語れる子が増えるのではないかなと思っています。**実際のプログラミングの料理の工程を学んで、その後にリアルの調理方法を学ぶので立体的に料理とはなんぞや、プログラミングとは何なのか理解して喜んでくださる方が多いのではないかと思います」

Q 実際に学んでどんなことを持ち帰ってほしい

「一言でいえば、生きる力。プログラミングは今後どんどん使われて行きますし、今後は設えられた答えがあるのではなく、自分で考えて答えを作る力が必要になるので、それは料理もプログラミングも同じなのかなと思います」